

『慶應マーケティング論究』
第1巻 (Spring, 2003)

巻頭言

慶應義塾大学 商学部 小野晃典研究会
第1期ゼミ長 白木俊介

経済の成長鈍化、環境変化によって日本の経済社会は、いま、かつてないほどの変貌を遂げている。このような激動の時代であるからこそ、現実の変化を冷静に認識し、的確に改革を断行できる能力が必要とされ、斬新なアイデアを生み出し、社会を大きく変容させられる人物が求められている。

小野晃典研究会が発足したのは、このような時代である。それゆえに、第1期生として揃いし面々は、自らの手で研究会を動かしていくことに情熱を注ぐ者ばかりであった。我々は実績、伝統、歴史で安定した既存の研究会で、決められた知識をただ習得するだけでは飽き足らず、未開拓で、未知の可能性を秘めている新規研究会の組織を自ら構築し、研究会のコンセプトを自らデザインすることを敢えて選んだのである。しかし、個性をはっきりと示す第1期生は、真っ白いキャンパスのように何も描かれていない小野晃典研究会に思い思いの色を塗ろうとするばかりに、その色を1色に統一することは困難であった。ゼミの進め方1つ1つに文句とも言える意見が多数挙げられ、幾度となく議論された。サブゼミはいつも延長を余儀なくされ、放課後も個々の意識の共有化を図ろうと誰が言うともなく飲み会が開かれ、そこでも、ゼミの方針に関して議論された。ゼミの進め方に問題があれば、柔軟に修正を加え、少しずつであるが目的意識の共有化が図られたのである。このように、数多くの議論が行われ、何度となくゼミの方向性が確認されたのも全ては、第1期生が小野晃典研究会に賭けていたからに他ならない。大学生活の残り2年間、自己を成長させるために入会した研究会で、自らの力を発揮したかったのである。小野晃典研究会第1期生は、よく言えば個性が豊かであり、悪く言えばわがままである。そのため、1つの考えに押さえ込むのではなく、1人1人の意見を尊重し、激しい議論を戦わせ、毎日のように個々人が葛藤しながら活動することこそ、1期生がうまくやっていく方法であったのである。このような活動の末、いつしか、小野晃典研究会には共に成長していこうとする土壌が存在するようになっていた。小野晃典研究会は、何かに真剣に打ち込む場所であり、それぞれが力を発揮できる環境であり、尊敬できる仲間達から刺激を受ける機会を提供してくれた。

『慶應マーケティング論究・第1巻』は、自らの考えを貫き通し、日々、意見をぶつけ合わせ、猛烈に成長を遂げた我々、小野晃典研究会第1期生の集大成である。それゆえに、既存の研究を要約するといった学生の視点を記述しただけの論文は、決して本論文集に存在しない。第1期生の豊かな個性同様に、自らの興味の赴くまま研究トピック

は選択され、学生であるにもかかわらず著名な研究者と精一杯肩を並べ、対等に議論を戦わせようと誰もが試みている。それは、学問は誰にでも平等に開かれていることをご教授下さった小野晃典先生に自らの成長を示そうとするかのようなふうでもあった。その論文に対して小野晃典先生は、社会に足を踏み入れる者に対する最後の試練とでも言うように個々の論文の内容に筆を入れ、突き返して下さった。第1期生と小野晃典先生との間を各々の論文が何往復とするうちに、既存仮説の問題点を指摘して代替案を案出するという創造的な学術論文が完成に至ったのである。

「ペンは剣より強し」

この言葉が慶應義塾のシンボルに込められている言葉であることは周知のとおりである。しかし、もし小野晃典研究会で学ばなければ、我々はこの言葉の真なる意味を実感する塾生たりえたであろうか。我々は小野晃典研究会で格闘した2年間で、その意味をひしひしと感じ、心の奥底に刻み込んだのである。

本論文集の編纂を終えるとまもなく、我々は三田の山を降り、厳しく結果が求められる社会に足を踏み出す。その社会は、小野晃典研究会のように真っ白なキャンパスではない。幾度となく上塗りが繰り返され、補修が加えられた社会は、上述のように経済の成長が鈍化した現在、何色とも呼べない状況であろう。我々はこのような日本経済を明るく立ち直らせる役割を担っているはずである。現実の変化を冷静に認識し、斬新なアイデアを生み出し、的確に改革を断行し、社会を大きく変容させるのは、我々でなくてはならない。しかし、時には解決困難とも言える課題に直面するであろう。その時にこそ、我々が恩師や仲間と議論を戦わせ葛藤してきた経験は、有益な糧となり、確固たる道標になるに違いない。また、長い人生の中では、社会の不条理さに打ちひしがれ、絶望にどん底に追いやられる日もあるであろう。その時にこそ、この論文集を再び開いて、何に向けてとも分からずに情熱をぶつけていた日々、漠然とした夢を追いかけて議論を戦わせていた日々、徹夜で研究に明け暮れた日々を思い出したい。そして機が訪れたとき、三田山上のいつもの場所で学友たちと再会したい。

末筆ながら、未熟な私たちを支えて下さった小野晃典先生に心から深い感謝の念をお伝えしたい。組織が硬直化し、進むべき方向を1つに絞ることさえできなかった我々の問題点を指摘して下さったのは先生であった。口ばかり達者で筆の進まない不甲斐ない我々に文句1つ言わず、草稿に目を通して頂いたのも先生であった。我々に対する指導のためにご自宅を開放して頂き、1度に何名もの草稿に筆を入れて頂いたこと、徹夜までして我々の論文に筆を入れて下さったことは、決して忘れることができない。先生に目を通して頂いた草稿が真っ赤な字で埋め尽くされているのを見たときには、先生の深い愛情を感じずにはいられなかった。先生の御指導があったからこそ、我々は急激に成長し「ペンは剣より強し」という言葉を心に刻むことができたことは言うまでもない。2年間に及ぶその親身な御指導にもう一度、深謝したい。